

## ガストン・フェビュスの『狩猟の書』 - アンジュー本の挿絵における伝統と刷新 -

高木 麻紀子 (東京藝術大学)

本発表は、中世末期世俗写本の白眉であるガストン・フェビュスの『狩猟の書』の模本のうち、15世紀中葉にアンジュー家周辺で制作された1冊(パリ国立図書館 ms.fr.1291、以下アンジュー本)に注目し、『狩猟の書』の挿絵の系譜における変遷とその要因の考察を試みる。

『狩猟の書』は、14世紀南仏の大領主フォワ伯ガストン三世渾名フェビュスが、1387年から89年に著した狩猟術の概説書であり、豪華な挿絵サイクルを伴う世俗装飾写本として西洋中世美術史上知られている。原本は散逸したものの、約一世紀間に亘り継続的に制作された46冊の模本が現存することから、世俗写本研究において、テキストと挿絵の相関を含めイメージの変遷過程を考察し得る興味深い写本群である。しかし、美術史からの体系的な研究は未だなく、後期模本の位置付けは特に判然としない。当模本に関する言及も僅かであり、ポルシェは挿絵画家をアンジュー公ルネの芸術サークルに帰し、また、アヴリルは以前の『狩猟の書』図像からの刷新を指摘したが、具体的な比較例の提示はなく、その刷新が何に起因するのかも説明されていない。そこで発表者は、アンジュー本の挿絵の変遷とその要因を、実見により得られた情報を踏まえた上で、『狩猟の書』の系譜からの図像的考察に加え、15世紀中葉のフランス絵画の動向を鑑みた様式分析という視座から検討したい。

初期模本の挿絵数が86点なのに対し、アンジュー本では28点に減少するが、そこには初期の図像をほぼ忠実に踏襲するものと、新たな図像へと変貌を遂げるものの双方が現れる。例えば、猟犬を伴う各獲物の狩猟方法が記されるチャプターでは、初期模本には見られない具象的なモチーフが新たに描写される。こうした革新の要因は、テキストにおいてフェビュスが詳述する獲物の特性や狩猟の手順の、よりリテラルな視覚化が目指されたためと考えられ、その際『狩猟の書』以外の作例の図像を発想源とした可能性も指摘できるだろう。

同時に、アンジュー本の挿絵では構図にも大きな変化が生じる。実際、アンジュー本の挿絵における初期模本からの変遷を様式的側面から見ると、最大の刷新は、一定の空間的深度を持つ清新な画面構成にあると考えられ、それはこの挿絵画家が、15世紀中葉にロワール河流域で生まれたフランスの新たな絵画様式の洗礼を受けていたことを物語っていると言えるだろう。特に、狼狩りの挿絵における、走る馬を背面から活写し、その動きのベクトルをエスコートするかの如く画面奥へと道を湾曲させる構成は、ジャン・フーケによる騎馬行列と通底する画面構成と捉えることが可能である。『狩猟の書』の系譜から見た時、アンジュー本の挿絵に見出される刷新の契機は、こうした芸術環境での制作にあり、『狩猟の書』の挿絵が15世紀フランス絵画史の動向を踏まえて変遷してゆく様相が浮かび上がるだろう。